社会部↔あなた

言わせて 聞かせて

# 「違っていて当たり前」

先日、社会部に分厚い封筒が届きました。送り主は、広島県福山市立松永中の池原正敏教諭(57)。中に入っていたのは、中学3年生84人分の作文でした。

テーマはLGBT(性的少数者)です。池原教諭は一昨年から、生徒が当事者から話を聞いたり、新聞記事を読んで考えを文章にしたりする授業をしてきました。

今回の作文は、このコーナーに昨年11月29日に掲載された記事がきっかけでした。私が学生時代、友人から心と体の性が一致しない「トランスジェンダー」だと打ち明けられた時、正面から受け止められなかった体験を基に書いたところ、生徒らは記事を読み、それぞれの思いをつづってくれていました。

LGBTの割合はほぼ10人に1人と言われ、中学生にも身近な存在のようです。

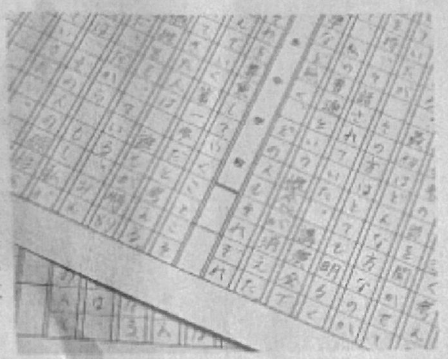
「私は3年生になってから、学校帰りに友達からカミングアウトされました」

女子生徒の一人は、そんな体験を書きました。生徒は友達に打ち明けられる前から、授業を通じて当事者の生きづらさを想像し、考えを巡らせてきたといいます。「その子の痛みやつらさを共有したい」と記していました。

池原教諭が、こうした授業を始めたのは、生徒から性的指向の悩みを相談される機会があったからです。思春期の子どもは同性同士が仲良くしていると、からかいの意味で「ゲイ」「レズ」という言葉を使ってしまうこともあります。耳にした生徒が深く傷つく恐れもありました。

今回の作文を読むと、生徒らが無自覚な偏見に気付いたことがうかがえます。

ある生徒は、当事者の講演を聞いて考えが変わったと振り返り、「普通という基準はなく、どの人もそれぞれの個性がある」と書きました。また、「女だから○○」「男だから○○」という言葉について、「誰かが『私は普通じゃない』と苦しむかもしれない」との意見もありました。



松永中の3年生が書いた作文。「普通とは何か」を考えた生徒が多かった

宝塚大の日高庸晴教授が2019年、全国のLGBT約1万人に実施したアンケートでは、「小中高時代にいじめにあった」と回答した人は約6割でした。若い世代のほうが低い傾向がありますが、10代でも47・4%に上ります。

文部科学省によると、最近は、「性の多様性」について記述する教科書も一部あるようですが、ほとんど教わる機会がない子どもが多いのが実情のようです。

どんな物事でも、自分と異なる何かに出会った時の受け止め方は人それぞれです。見「周りの人と違うからだめなのではなく、周りの人と違うから自分がいる」。授業を通じ、そんな考えに至った生徒もいました。

なかったことにするか、否定するか。話をしても分かり合えないかもしれません。それでも、「違っていて当たり前」と前向きに考えることができれば、他者に寛容になれるのではないでしょうか。

3年生はもうすぐ卒業です。松永中での学びが、これからの時代を生きるヒントになることを願っています。

**今回の担当は**

川崎陽子(かわさき・ようこ) 大学では生化学を専攻。1月はコロナ治療の最前線に立つ救命救急センターを取材した。40歳。

身近な疑問や困り事、記事への感想や意見を寄せて下さい

〒530-8551(住所不要)読売新聞大阪本社社会部「言わせて」係

iwasete@yomiuri.com

QRコードから「友だち追加」をして下さい

**各地の気温と天気** 13日